ソニー教育財団 × ぐうたら村保育実践ゼミナール

「やってみよう！科学する心 × いのち真ん中社会の保育実践」

報告レポート

『いのちを未来へ繋ぐ保育』

社会福祉法人遍照会 東大沢保育園　品田 晃輝

1、 はじめに

ICT 社会の現在、至るところで「地球沸騰化」「環境問題」「SDGs」という言葉をよく耳にすることがある。しかし、私自身のどこかで「自分には然程関係ない事」「まだ大丈夫」という思いがあった。ましてや、保育の中でそのような取り組みを「子どもたちと考え、行う」ということの重要性をあまり感じていなかった。

そんな中で、今回の保育実践ゼミナールに参加する機会をいただき、今までの考えがひっくり返る体験をした。

今回の報告書では、「ぐうたら村で感じたこと」を元に「保育園で実践したこと」を紹介し、実践したことでの子どもの変化を報告したいと思う。

2、ぐうたら村で感じたこと

私が勤めている東大沢保育園には、
園庭はあるものの、園の周りが住宅街ということもあり、大自然に触れる機会が子どもたち然り、保育者も多くはなかった。

そんな中で、７月に初めてぐうたら村を訪れ、私の中での『自然』の捉え方が大きく変わった。

特に、自然探索で山に入り、五感を通して自然を感じたことが、その変化の大きなきっかけとなった。

「土の中にいる「土の分解者」(ダンゴムシやミミズ、菌類等)」　※１
「沢の上の倒木を橋代わりに渡る生き物たち」　※２
「倒木から芽生える小さな植物」　※３
「木の影に広がるコケ植物」　※４

山の中では、さまざまな『いのち』が共存し、お互いを支え合いながら生きているように感じた。

この体験を通して、「自然豊かな場所には生き物がたくさんいる」と考えていたものが、
「生き物がいることで自然が豊かになっている」という考え方、つまりは、
『自然は、いのちの繋がりによって成り立っている』という考え方に変わったのである。

※1

※2

※3

※4

3、 保育実践事例

―― ••• 行ったこと

―― ••• 新たな発見、わかったこと

―― ••• 子どもの反応、気づき、変化

○事例１－１　「お肉って牛さんの『いのち』からできていたんだね」

ぐうたら村で感じた「自然といのちの繋がり」をもとに、ぐうたら村で撮影した写真を用いて、『いのち』について考えることとした。

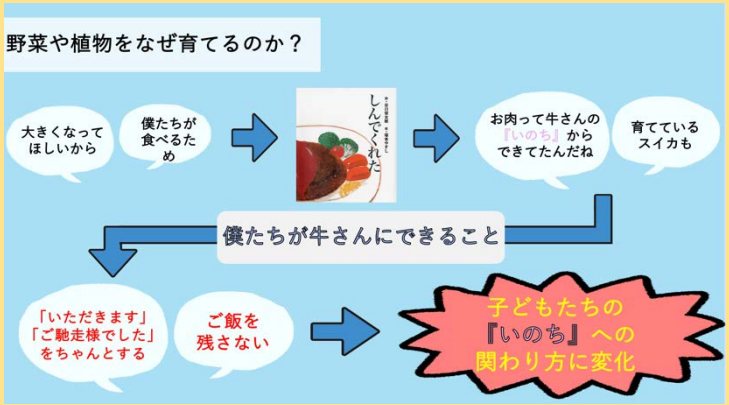
プロジェクターを使い、子どもと写真を見ていく中で、「緑いっぱい」「ダンゴムシ触りたい！」「木から木が生えてる！」と、感じたことをそのまま言葉にする姿が見られ、写真を通して自然に触れる貴重な機会になった。

その後、保育園で食育活動の一環として育てていた夏野菜をきっかけに、サークルタイムを開き、「なぜ野菜を育てているのか」を話し合うこととした。

子どもたちからは、「大きくなってほしいから」「僕たちが食べるため」という意見が出た。
話し合いの中では、「大きくなってほしいってパパとママみたいだね」「でも、パパとママは僕たちを食べないよ」という、おもしろい掛け合いも見られた。

話し合いを進めていく中で、『食べ物にもすべていのちがある』ということを子どもにもわかりやすく説明するために、『しんでくれた』という１冊の絵本を保育者が読むことにした。
私が担当しているクラスには、絵本が大好きな子が多くいるが、『しんでくれた』を読み終えた後、何人かの子どもは、少し悲しそうな表情を見せていた。

読み聞かせの後、子どもたちと絵本について振り返ると、「お肉って牛さんの『いのち』からできていたんだね」「お肉だけじゃなくてお魚も」「僕たちが育てているスイカもだね」という、気づきの声が聞こえてきた。
その気づきの声をもとに、次は『僕たちが食べ物にできること』を子どもたちと話し合うと、「いただきます、ごちそうさまでした、をちゃんと言う」「ご飯を残さない」といった意見や「忘れずに水やりをする」といった意見が出た。



○事例１－２　「種も『いのち』だから、植えたらスイカができるかな？」

サークルタイム後すぐに、子どもたちの行動に大きな変化が見られた。
給食では、心を込めて「いただきます」「ごちそうさまでした」の挨拶をする姿が見られ、以前よりも明らかに、「残飯０」の日が増えた。
野菜の栽培では、水やりの際に「大きくなってね」と声をかけながら水やりを行うなど、これまでは見られなかった、食べ物を大切に思う気持ちが子どもたちの中で芽生えていることを感じられた。
また、その日から子どもたちの会話の中で『いのち』という言葉が多く聞こえるようになり、普段の生活から子どもたち同士で『いのち』について考えるきっかけになることができた。

別の日、おやつでスイカが出ると、スイカを食べていた子が種を見ながら、
「種も『いのち』だから、植えたらスイカができるのかな」と、他児と話していた。
保育者が「そうだね、もしかしたらスイカができるかもね」と話しかけると、目を輝かせながら「この種植えてみたい！」と言い、スイカの種を植えてみることになった。

○事例１－３　「やった！ずっとスイカが食べられる！」

スイカの種を植えたその日から、登園するとすぐに観察を始めた。
また、登園後だけでなく、給食後、午睡明け、降園時など、１日の中で何回も観察する姿が見られ、毎日楽しみに観察を続けていた。

そして数日後、芽が出ているのを発見すると、目を輝かせながら「芽が出てる！」「やった！ずっとスイカが食べられる！」と、他児と一緒に嬉しそうに話をしていた。
スイカの種から、『いのち』の誕生に触れたことをきっかけに、「トマトの種はできるかな？」と、色々な野菜で挑戦しようとする姿が見られた。
その後、時期的な環境で枯れてしまい少し悲しそうな表情を見せていたが、「次の夏はもっと早く植えてみよう」と、会話している姿が見られ、『いのち』を考えたことから始まった野菜への興味は、今現在も広がり続けている。

4、まとめ

今回の実践を通して、『いのち』について子どもたちと考えることが、今の保育において重要であることを実感した。『いのち』についての話し合いをきっかけに、子どもたちは食べ物や生き物の『いのち』に気づき、大切にしようとする姿が見られるようになった。
『いのち』という言葉は、子どもたちにとって分かりやすく、身の回りのものすべてが『いのち』から成り立っていることを知ることで、食べ物や物を大切にする意識が芽生えた。その意識は「いただきます」「ごちそうさま」を丁寧に言うことや残さず食べること、野菜を育てることへの興味へとつながった。

『いのちを未来へ繋ぐ』をキーワードに、私はSDGsと保育の関わりを「いのちを大切にし、そのいのちを未来へ繋いでいくこと」と捉え、自分なりの『いのち主体の保育』を実践した結果、子どもたちの「いのちについての考え方」が大きく変化し、保育園全体でも「いのちを大切にし、そのいのちを未来へ繋ぐ」という保育の在り方を考える貴重な機会となった。
このように、「いのちを大切にすること」は「物を大切にすること」にもつながり、その積み重ねが、持続可能な社会を目指すSDGsとも繋がっていく。
「いのちを未来へ繋ぐ保育」は、従来の「子どもの命を未来へ繋ぐ」という考え方に加え、現代的なSDGsの視点で「さまざまな命を大切にしていく」という意味を含んでおり、保育の中で「いのち」をテーマに考えることは、子どもたちにとって自然な形で環境や持続可能性を意識するきっかけとなるのではないかと私は考える。

今後も、子どもたちと共に、身近な「いのち」に目を向けながら、日々の保育を大切にしていきたい。